

500字の器にくらしをギョツと

女性投稿欄「ひととき」は来月、誕生から70年を迎えます。約500字に思いを込める書き方は、やはり限られた字数でコラムをつづってきた天声人語の元筆者が、体験を踏まえながら解きほぐします。



日々、朝日新聞社に届く「ひととき」の投稿。メールなども含め、全国で週200通近くになる

日々のくらしのなかで誰もが何かを思い、何かを感じます。それを言葉で表して人に読んでもらおうとするならば、意志、労力、それに時間が必要になります。そもそも書きたいと思うことが、はなから整理整頓されて「まあ書いてください」と待っているなんてことは皆無です。まずはどう書くかから知恵を絞らなくてはなりません。そして書き出せば、語彙の乏しさを嘆き、思うように言葉を操れずにいるらだち、ため息ばかりついている(私の経験)。おそろくは同様の苦勞をこえて紙面に載る「ひととき」の一篇一編には、掌編小説の味わいを感じます。くら



天声人語元筆者 福島申二が読むひととき

しや人生への丁寧なまなざしに、内なる琴線がぼんやりと鳴るのです。先日、ここ数年の掲載作を続けて読みました。どれも次へ読み移るのに少し間を要しました。すぐに移るのが惜しいのです。集約的な「大きな言葉」ではなく、いわば巨盛りの小さな言葉で細部が描かれていることが理由の一つでしょう。読むことで、言葉にされないまま自分の周りや心の内にあるものを、ふつと形にして見せてもらった気になるのです。「ひととき」は小さな器で

でも文章は短いから楽に書けるわけではありませぬ。作文の趣意を「自分にしか書けないことを、だれにでもわかる文章で書く」といったのは井上ひさしさんでした。机の前に張っておきたい至言ですが、字数の足かせはその難敵です。ちなみに天声人語は603文字です。あれを書けばこれを書けない。短く書くことは書くことを選ぶ技巧。苦心と義裏一体です。「書き上手」とはつまり「捨て上手」でもあります。天声人語を書く途中でいつも自問していたのは、自

分は「何を書こうとしていたのか」ということでした。それによって「余計なもの」も見えてきます。コラムは当初の設計図通りに書けるはいいいちいもありません。書いていくうちに最初の発想にどんどんはずみがついて愚考が深まり、ものごとがしつかりと厚みしてくる。それが文章を書くことの喜びであり醍醐味でもあります。書くことは考えること、とはよく言ったものです。雅語や美文は不要でしょう。普段使っている言葉で善意の「ひととき」は十分書けます(スライスははいきません)。平明であることは文章の一番の美質である。私は思っています。

「書き上手」とは「捨て上手」

冒頭数行でぐつと離陸を

天声人語の書き出しでは冒頭の数行で読み手を引きつけ、ぐつと離陸するよう心がけました。「ひととき」にも心ひかれる書き出しがたくさんあります。我が家の電子レンジは、長男が生まれたときに購入したものです。長男は32歳で昭和生まれ。ということは、レンジも32歳。昭和から使い続けています。(2019年10月)

美にさりげないのですが「32」の数字が読み手の袖を引きまします。ちなみに掲載は令和元年でした。先日、ダンゴムシのお母さんをみどりしました。12時間かけて子どもを産み、息絶えました。(20年9月) 何、これ、と悪化する引力があつた。カワカワの小説のような、といえは大げさですが、冒頭一段落でのごとく離陸例です。

コロナ禍で飲食店の廃業がニュースになる昨今、新小岩駅の近くで17年続けてきた、小さなバーが店を閉めました。(21年1月) 新小岩、17年、小さなバーという細部が、どこか張りつめたものを感じさせます。読み進めるとその予感には当たっていました。40年ほど前、ある女性誌を編集していた時、「女と男」という特集を組んだことがあった。ところが、印刷

所から戻ってきた校正手は、題字も文中の引用句もすべて「男と女」に書き直されていた。印刷所では「間違い」としか思われなかったらしい。(19年8月) 思わぬ怒りを排して先手の内を見せしてしまう。こんな冒頭に出会ったら読み進めるしかありません。娘へ。お母さんは悲しいです。中学受験を終え、あなたの元へスマートフォンが来てから、あなたとお母

70周年イベント 読者150人招待

来月2日 東京・築地

10月2日(土)に、ひととき70周年記念イベント「くらしを書く、書いて生きる」を、東京・築地の浜離宮朝日小ホールで開催します。午後2時開演で、読者150人を招待。作家・桐野夏生さんらが登壇します。申し込みは、住復はがき(1人1枚)に、郵便番号、住所、氏名(返信用にも)、年齢、電話番号を明記の上、〒104・8011(住所不要)朝日新聞文化くらし報道部・ひととき70周年事務局へ。または、<http://t.asahi.com/hitotoki106>からも申し込みます(QRコードを可読み取って下さい)。いずれも15日締め切り(は



10月20日(土)に、ひととき70周年記念イベント「くらしを書く、書いて生きる」を、東京・築地の浜離宮朝日小ホールで開催します。午後2時開演で、読者150人を招待。作家・桐野夏生さんらが登壇します。申し込みは、住復はがき(1人1枚)に、郵便番号、住所、氏名(返信用にも)、年齢、電話番号を明記の上、〒104・8011(住所不要)朝日新聞文化くらし報道部・ひととき70周年事務局へ。または、<http://t.asahi.com/hitotoki106>からも申し込みます(QRコードを可読み取って下さい)。いずれも15日締め切り(は